

ここに新田寂清峰昌安信士こと竹島康夫殿、明治四十三年十一月、日の出村は平井に竹島家の三男として生を受く。幼時を山紫水明の地に過ごし、しかるべき学業終えしのち、八王子は日吉町なる村田氏のもとに弟子入りして匠の業を学ぶ。やがて昭和十年、故人二十六才、縁ありて佳枝殿と出逢い結婚。これを生涯の伴侶となし、而して家に二男四女を挙げしものなり。この結婚を機に独立、現在地に風呂桶等各種の桶を製造する竹島風呂桶店を開業す。

共に暮らす幸せのうちに、夫婦力あわせて家業に励み応分の繁栄をみつつも、世界的な恐慌の中、次第に暗雲この国を覆いて昭和十六年、太平洋戦争開戦。されど数年のうちに戦我が国に利あらずして、多くの若者かの地に果てるなか徴兵年齢も徐々に上がり、昭和十九年、三十二才なる康夫殿のもとにも赤紙舞い来たりしものなり。かくて出征、配属先は房総方面とか。同時に徴兵されしものの中にも硫黄島などに配属され、玉碎せし者も多かりしこと聞けば、誠に幸いなることなり。

一方残されし一家の身の上、敗戦を間近にする八月は一日のこととか、人の命運の不思議なり。連日、各地で空襲の報せ、立川に近き当八王子にも今日か明日かと人々肝冷やす日々のこと、幼き子があまりにも激しく泣きてやまぬことあり。これをいぶかしく思っている母、空襲の前兆にあらんかと思ひ街中なる家を捨て

郊外に逃れることを決断、子等ひきつれて、東南にあたる北野方面目指して急ぐ。されど途中一向に空襲の気配なく、一度は家に戻らんとするも、思い直して再び北野へ急ぐ。

やがてB29の大群飛来、あつという間に八王子市街は火の海、目標をそれし爆弾のいくつかは、避難せる神社の付近にも落下、爆撃の振動に幼き子の身体浮き上がりしとか、誠に恐ろしきことなり。

八王子中央を流れる浅川河原に逃れし人等、機銃掃射にて倒れし人多かりきとか、生死の分かれめなり。やがて街は焼け落ちて灰燼に帰す。しばしのち、ほとぼりさめて、ともかくにも我が家は如何にと家めがけて歩く。道路はめくられて熱く、くつの下にわらなど結わえて進むうちにも、突如闇の中に照明弾、とっさに母は子等を近くの側溝にほうりて隠し、機銃掃射を避け命からがら逃れしものとか。

母は強し、この母のありてこそ子等の命永らえしものなり。のち親戚のもの焼け跡に訪れ来て、防空壕を掘り起こし死体なきを確かめてその生存を期しものとか。

やがて敗戦を迎え、戦後の混乱のなか一年程過ぎ、焼け跡にバラックを建て辛うじてその日その日を暮らしつつある日、故人ようやくやくに復員することを得たり。家人の喜びいばかりならんか。

徐々に戦後の混乱も治まりつつあるなか、今日の如くにプラスチックなどなき時代、タライ・おひつ・風呂桶などと極めて需要多く、一家総出で家業に励み大いに栄えしものなり。かくて時は過ぎゆき、子等巣立ちてそれぞれに家を興す。

やがてプラスチックの時代となり家業も徐々に縮小す。次女なる年子殿と暮らしつつ、愛孫十三子また近年に至りては曾孫九子を数え、共にまみえるを大いなる喜びとなし、殊にも内孫なる心優しき男子三人と仲良く過ごしけり。

また時として競馬場に足を運びてはささやかにギャンブルを楽しみ、テレビなどは国会中継を好みて、老いを感じさせぬ如くなり。また木の樽の良さ見直されることなどもありて、八十才に至りても、頼まれてこれを為したり。愛子等もこれを敬愛し、百年の寿を願いつつそれぞれに至孝を極めんとす。殊にも、三女勝江殿の夫君信二殿、度々故人を旅に誘いしとか、故人これを殊の外の喜びとなす。かくの如くに米寿こえてもその身恙なく老いを養いてあり。

この十月にも伊香保・高崎観音等、十二月に至りても千葉県なる誕生寺を訪れんとし、子等都合つけあいてこれを助けしものなり。されどさすがに寄る年の波、誕生寺訪れたるのちいささか四大乱して病舎に伏したり。

かくあるうちにも本年は九月、かねて念願の夫人の三十三忌、自らは出席する能わずといえども施主を勤め、病床に伏すといえども気力衰えることなし。

されば医師も旬日の退院を約す程なるに、いかなることにてやある。ある朝、

九十二才を一期として恩愛の家に別れを告げ、北邙の風にゆらりゆらめきて黄泉の客となる。

愛子・愛孫また親眷、枕辺に座して断末の水を掬し別離を悲しむの時、顧みすればその生涯、邯鄲の夢なりとはいえ誠に実り多きものなり。四人の子等に恵まれ、かの八王子大空襲をものぎて一人として欠けることなくこれを育む。かくて今日それぞれより至孝を受け、また多くの愛孫曾孫に囲まれ幸多き日々を過ごしけり。

晩年に至りても無理せぬ程に家業に励み、例え病舎に伏す日の来るといへども、常に心確かに保ち、一門の見舞いに応えてこれを喜ぶ。

昨今は、正月まであと何日などと指折り数えつつ、冥土の旅の一里塚、ひょうひょうとしてこれを飛び越しかの地に赴かんとし、やすらかにやすらかにみまかる。正に大往生なり。